

ジャータカのこころ : シビ王物語に聴く

著者	渡邊 愛子
雑誌名	真実心
号	29
ページ	107-151
発行年	2008-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000584/

ジャータカのこころ

——シビ王物語に聴く

渡 邊 愛 子

はじめに

みなさま、こんにちは。金曜日の五限目ですね、一番最後の疲れた時間にたくさんおいで頂いてとても嬉しく思います。「すごく少ないんですよ」と先生方から伺っておりましたが、こんなにたくさん来て頂けて嬉しいです。

今日は思い切ってサリーを着てきました。何故恥ずかしいのにサリーを着てきたかと申しますと、宗教講座とか、インド仏教とか、何となく皆さんとはご縁がなくて、

遠くの方の面白くないものだと思っていらっしゃる方がおられるのではないかしらと思ひまして。民族衣装だったら、どの国の民族衣装も、特に女性にとつては興味のあ
るものに違いなから、今日は思い切つて、お友達の結婚式に着るような、美しいサ
リーをお借りしてきました。月に二度、第一金曜と第三金曜のこの時間に、真宗文化
研究所で行われております「聖典読書会」では、サリーの着付けもいたしますので、
週の最後のお疲れの時間ですが、着てみようかなと思う人がいらしたら、どうぞ、第
一と第三の金曜の第五限目、真宗文化研究所においでください。先に宣伝をしてしま
いました。

ジャータカとは

ところで皆さん、「ジャータカ」って聞いたことのある方、手を挙げてください。
はい、ありがとうございます。ジャータカというのは、ほとんど皆さん初めて聞かれ
る言葉だということがわかりました。私もジャータカという言葉聞いたのは十九歳

ジャータカのころ

ぐらい、皆さんと同じくらいの年に初めて聞いたのです。ですが、中身については、皆さんはたぶん、きつとご存じ。何故なら、ジャータカというインドの古いお経典は、日本に早くから伝わりましてね、日本文学、今昔物語とか、宇治拾遺物語とか、そういうものをお習いになられましたでしょう、高校で。その中にジャータカのお話がたくさん紹介されているのです。ですから、「これの原典はジャータカです」と申し上げて、「いえ、それは日本のお伽噺ですよ」といつて相手にされなくて困ったという実際の経験もあるくらい、お話の内容は、実は日本の人々には昔から親しいものなんです。ただ、ジャータカという言葉では今日初めてかもしれませんので、今から少しの間ジャータカということについてお話しようと思います。

「釋尊が前世において菩薩であった時代に、衆生を救った多くの善行を集めた物語をいう」という部分を簡単にお話し申し上げます。

「釈尊」はおわかりですね。ゴータマ・シッタールタ、ゴータマ・ブツダは釈迦族の尊いお方、尊者でいらしたので、釈尊と呼ばれています。そして「菩薩」という言葉がありますね。菩薩という言葉聞いた事のない方、手を挙げてください。いらっ

しゃいますか。たいていご存じですね。聞いたことはあるけれども本当はどういう意味なのかしら、ということになるとちよつと説明が必要かと思っています。ボーディサツタというパーリ語がございまして、ボーディというのは眞実の智慧、悟りということ。サツタというのは命あるもの。人間をはじめ、命あるもののことを言います。ボーディサツタというのは、悟り、即ち眞実の智慧を求めて生きていく存在のことを言います。人間だけでなく命あるものすべてを含めて、それをボーディサツタと言います。私たちには便利なカタカナがありますが、中国には漢字だけでカタカナがありません。ですから、ボーディサツタというパーリ語を、この、菩提薩多という漢字に充てたのです。漢字そのものの意味とは全く無関係に、読み方だけを漢字をカタカナのように使つてボーディサツタを漢字で菩提薩多と書き写したんですね。それをさらに長いので省略しまして、菩薩、となつたわけです。それを私たちは菩薩と昔から聞き慣わし、呼び慣わしているのです。「衆生」これも耳慣れない言葉ですね。衆生というのは、生きとし生けるものという意味です。生きているもの、生命あるものという意味です。人間だけでない。人間を含む全ての生き物。動植物含めてです。

ジャータカのころ

それを救った多くの善行を集めた物語をジャータカと申します。

ジャータカは一体何かしらと考えます時、まず皆さん引つかかるかもしれません。前世って何ですか。そんなのあるんですか。迷信じゃないんですかって思う方がいらつしやるかもしれませんね。前世という考え方は、今の皆さんには少し馴染みが薄いかもしれませんが、私が子供の頃、五、六十年昔には祖母や母たちは極めて日常的に前世ということを言っておりました。これは仏教だけの考え方ではなくて、仏教が二五〇〇年前にお釈迦様によって開かれるもつと前から、インドには仏教以前にバラモン教というのがありました。今もそれはヒンズー教と名前を変えておりますが、その古いバラモン教の時代からある考え方なのです。めんどろな話になりそうですか。今、皆さん、眠い人、手を挙げてください。あら、皆さん眠くないですか。午後のこの時間は眠くなります。何故眠くなるのかしら。お昼ご飯でお腹いっぱいになって、午前の授業が済んでくたびれて眠くなるというのが自然だと思えますが。例えば午前中、重労働をして午後になって疲れて、今眠くなるということがありますね。また、昨日の晩良く寝た人は今日はたぶんそれほど眠くないでしょう。それから、昨日寝不

足だった人、私です。今朝四時まで起きてましたから。昨日寝不足だった人は今日とつても眠たいですね。つまり、昨日の影響が今日に出ますね。そして今日の結果が明日出ますね。その考え方をものすごく長くして、今生きている人生を、「おぎゃあ」と生まれて目を閉じるまでの一生だけ、と考えないで、遠い昔のインドの人々は、この世に「おぎゃあ」と生まれるまでに、ずーっと昔からの、人間だけではなかったかもしれないませんが、生涯があつたのだと。無数の生涯があつたのだ。その無数の生涯を経て、今、たまたま私たちはこの光華の宗教講座に出席しているということ。そしてこの人生が終わると、また次の人生、次の生涯があるというふうに考えていたのです。今もインドの人は考えていると思います。ということとは、今現在こうしていることは、過去世の結果としてここにいる。そして今この生でしたことの結果が、また次の生に影響を与える。極めて科学的な考え方ではありませんか。ただ、昨日のこととお友達に聞けばわかるし、明日のこともお友達が証明してくれるけれども、過去世のことは誰も証明してくれない。来世のことも誰も保証してくれない。目に見えないから、何も客観的に証明できないから、何となく本当かしら？と思っっているのが実

ジャータカのこころ

態ではないかと思えます。

さて、お釈迦様の時代はそういうわけで、現世のことは過去世の行為の影響による結果であると考えていました。お釈迦様は二五〇〇年前に、それまでの人間の歴史の中で誰も到達しなかったと思われる、最高の悟りに到達なさって、八十歳でお亡くなりになるまでの間、北インドのあちこちを遊行して、悩める人々にいつも良いアドバイスを与え続けました。このことを、当時のインドの人々が、あの人は本当に素晴らしいと、お釈迦様を讃め称える気持ちから、こんなに素晴らしい一生を過ごされたからには、この方はきつと過去世において、余程、人のできない素晴らしい行いをたくさんしてこられたに違いないと、こう考えられたのです。そして、それらの素晴らしい物語をたくさん集めて、『ジャータカ』という文献を作ったのです。これはざっとした言い方です。専門的な立場からするともっといろいろあると思いますが、ごく大雑把に申し上げるとそういうことになります。

つまり、お釈迦様は、二五〇〇年前にお釈迦様として生まれる前の無数の生涯で、誰にも真似のできない素晴らしい行いを続けた結果、最高の悟りに到達され、仏陀とな

って、素晴らしい一生をおくられたのだと、こういうこと。では一体どんな素晴らしい行いをしたのでしょうか、それが五四七の物語になった文献が残っているのです。この図書館にも『ジャータカ全集』という、春秋社から一〇巻の本が出版されて備えられています。また、真宗文化研究所にも備えられています。春秋社の版ばかりでなく、いくつかのジャータカの全集がございますから、興味のある方はどうぞ、図書館へ行ってみてください。「そんな、全集はとても」という人は、岩波少年文庫、これなら昔ご覧になったんじゃないやありませんか。岩波少年文庫にもジャータカが入っておりますから、新書判一冊でざっと読むことができます。

業と輪廻

― 業

そのジャータカが、どうしてそういうふうに成立するかということですね、これ

ジャータカのこころ

は、今お話したことで少しダブってまいりますけれども、仏教には、あるいは仏教以前から、業という考え方、それから輪廻という考え方があります。釈尊讃仰ということとは今申し上げた話。今度は、業と輪廻という思想のこと。これも難しく考えれば大変難しいので、私もちゃんと説明できないのですが、簡単にお話させて頂くと、業というのは行いということです。行いを仏教では三つに分けます。普通、行いというと、どうしても体でする行いだと思いますけれども、仏教では体でする行い。それから口で、言葉でする行い。それから心でする行い、三つに分けて、「身・口・意」体と口と心の三業と言っております。行いをそういうふうに分けて考えているわけです。そのように業というものが非常に大切に考えられています。前世の業が今の世を決める、この生涯で行った業が、行為が次の生涯を決めるというふうに考えています。ですから決して、誰か高い所にいらつしやる方が、運命を定めて「あなたはこういう人生を歩まなくてはなりません」と問答無用で押しつけられたものではなくて、今、私たちがここにこうしていられるのは、過去世においてここにこうしていられるような良い行いをしたからだと考えられます。もし悪い行いをしていたら地獄に落ち

ていたかもしれないし、犬や猫に生まれていたかもしれない。あるいはまた同じ人間に生まれても、こうして大学で授業を受けることができるというような、恵まれた環境には生まれなかったかもしれないんです。ともかく、こうして大学教育を受けられるという恵まれた環境に生まれたということは、皆さん方、ご存じないですが、私も知りませんが、過去世において何かきつと良いことをなさったから、人間に生まれて、ここで宗教講座を受けている、大学教育を受けているということです。こういうふうに考えます。ですから、全て人のせいでない。自分が過去世でしたことの結果、ここにいます。それならば今この生涯で良いことをするか悪いことをするかで、次の生涯が決まるということになります。次の生涯も私たち一人一人の責任において決まりますから、決して誰かが外から押しつけるように運命を与えるものではありませんから、これからの人生に責任を持つて、来世、もっと良い人生を送れるようにしようと思えば、一人一人の行い次第でそういうことが可能だということふうに考えるのが、業の思想です。

ジャータカのころ

― 輪廻

つぎに輪廻の思想ですが、この輪廻というのは、パーリ語ではサンサーラと言います。サンサーラというのは、流れるということです。川から海へ、海からまた雲になって、雨になって、川に落ちて、川を流れて、海へ行って……という水の一生を考えてみて頂くとわかりますが、留まることなく常に流れ続けている。これが輪廻です。サンサーラです。その流れ続けて止むことがないというサンサーラを、中国の方は輪廻と訳しました。これは車の輪が回るといことですね。車の輪が回るといことは、始めも終わりもない。止まっている時は別ですが、始めも終わりもなく、絶えず、ずっと回り続けている、これが車の輪の実態といいますが、働きですね。そういう言葉で中国の人は輪廻という訳を与えました。

さて、この輪廻というのは、皆さんには遠い思想かもしれませんが、私の世代では親や祖父母たちが絶えず言っていたことです。輪廻というのは、その昔、先程の仏教以前のバラモン教の時代からあった思想で、六道輪廻、六つの境界。下から言います

と、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天という六つの境界がある。これが命あるものの存在で、私たち人間は天のすぐ下、上から二番目というところに今生まれているわけです。それは過去世において良いことをした結果、天の次の二番目に生まれていくわけです。そしてまたこの世で悪いことをすれば、もつと違う世界に生まれてしまうはずです。良いことをすれば、天に生まれることができます。これが仏教以前にある、輪廻の思想です。これは仏教道徳といえますか、仏教倫理に大きな働きをしている思想です。この六道輪廻という思想は仏教以前からありました。仏教以前の時代には、人間の上の天、神々の世界に生まれることが一番、最高の目標でした。けれど、たとえ神々の世界に生まれても、「天人の五衰」と言いついて、人間の世界よりは寿命は長く、病気など苦しいことも少ないので良いのですけれども、決してそこが絶対の、最高の平和な世界ではないということがあります。

仏教の独特の面は、その六つの六道輪廻から解脱して涅槃に赴くということが大変重要な眼目なのです。お釈迦様という方はとても穏やかな人だったと私には思えます。ご自分が新しい思想に立たれた時に、それまでのものをラディカルに全部否定し

ジャータカのこころ

ないで、前からのものを大事に受けついで、それを大切に活用しながら、最後にご自分の新しい意見を述べられるという、そういう形で六道輪廻の思想を仏教に取り込んで、説法に活用なさいました。ジャータカもその思想の基に成り立っています。

実は私は、仏教を学ぶまでは、輪廻の思想は仏教独自の思想だと思いこんでおりました。そうしたら、仏教以前からあるインドの思想でした。それをお釈迦様が活用なさって、そこからさらに六道輪廻からも解脱して、涅槃、一番最高の目的の寂靜の世界を目指されたのが仏教ということになります。

さて、ややこしい話はみなさんにはちょっと眠そうですから、後はもう飛ばしまして、その五四七話あるジャータカの中の一つの物語を朗読させて頂こうと思います。

「シビ王ものがたり」

遠いむかしのインドです。シビという王さまがおさめる国がありました。

シビ王は勇敢でおそれを知らない人でした。

どうじに、こころの優しい王さまで、困っている人には、なんでも惜しみなくわかちあたえていました。

ある日の午後のことでした。

お昼寝からさめたシビ王は、ベッドをおりて、ゆつくりとバルコニーへでてゆきました。

午後のまどろみがまだあたりにたゆたっています。

風はそよともふかず、お城の庭の草も木も、まるで絵のようにじっとしていました。

バサ バサッ

とつぜん、かわいた激しい羽根の音があたりの静けさを破りました。

すばやく身がまえたシビ王は、用心ぶかく、あたりを見まわしました。

その王をめざして一羽のハトが飛んできました。

「なんだ。ハトか。なにことが起きたのかと思ったぞ」

いっしゅん、こわばったシビ王の表情が、いつものおだやかさに戻ろうとしたと

ジャータカのこころ

きでした。

バサ バサ バサッ

こげ茶色の大きなかたまりが、さらに激しい音をたて、一陣の風を起こして、シビ王の目のまえをサッと横ぎりしました。

ふたたび、キッと身がまえたシビ王の左うでにさっきのハトが矢のように飛びこんできました。

シビ王がハトをだきますと、また、さきほどの大きなかたまりが、王の頭のうえを急旋回して、バルコニーのらんかんにとまりました。

「なにものかと思えば、タカではないか。いったいどうしたというのだ。

大ぞらの勇者ともあろうおまえが、ハト一羽を必死で追いまわすとは……見苦しいぞ」

ブルブルと激しくふるえるハトを、シビ王はなだめるようにやさしく抱きなおして、タカを叱りました。

タカはするどい眼をいつそうガラガラ光らせて、いまにもハトにおそいかかろう

と、姿勢をひくくしていいました。

「王さま。そのハトはたしかに恐怖にふるえていましよう。

でも、わたしは空腹にたえかねているのです。

わたしのいのちのかてをおかえしてください」

「ならぬ。このハトは余をたのみに助けをもとめて飛びこんできたのだ。

そちに食べられるのを承知でわたすことはできぬ。さあ、かえれ!!」

シビ王の語調は断固としていて、たとえ神々の命令でも、はねかえすほどのいきおいでした。

しかし、タカはすこしもひるまず、語気をつよめていいました。

「シビ王さま。お言葉ですが、王さまはハトのいのちさえ助ければ、わたしが飢え死にするのはかまわないとおっしゃるのですか」

「そうはいっておらぬ」

「わたしが弱いものいじめをしてハトをおどしているのですたら、お叱りもごもつともです。ですが、わたしはもういくにちも、なにも食べていないのです。

ジャータカのこころ

そのハトは、いまやと手にいれかけたわたしのいのちのかてなのです。

さあ、どうかいますぐかえしてください」

「いや、だめだ。どうあつてもこのハトはわたせぬ」

シビ王は、自分のうでのなかのハトのふるえといのちのぬくもりだけを感じて、目のまえのタカのせつばつまった状況に無頓着だったことに気づき、ハツとしました。

ハトはシビ王のたくましいいうでのなかについて、王のたのもしい言葉をききながらも、こきざみに激しくふるえていました。

シビ王はハトがあわれに思われてなりませんでした。

「ハトよ。案ずるでない。このシビ王が、おまえをかならず守るといつておるのだ。

どんなことがあろうと、おまえをタカにわたしはせぬ。そんなにふるえては恐怖でいのちをちぢめてしまうではないか。

よいな、安心するがよいぞ」

シビ王はハトにいいきかせながら、こころのいっぽうでは、めまぐるしい速さで
思いをかけめぐらせていました。

——どうすればこのタカをすくえようか。このひろい城のもりにはタカのえさにな
る動物はいくらでもいる。

しかしその動物たちは、みなこのハトとおなじではないか。

いったいだれがすすんでタカに食われたいと望むだろうか。望まれればなんでも
与えてきたこのわたしだっていやだ。

いまこのしゅんかんにも、ほかのタカがほかのハトに追いついて飢えをみたして
いるにちがいない。

いや、このわたし自身これまでにどれほどのいのちをうばってきたことか。

このあいだのいくさの相手はじつに手ごわかった。

わが軍の鉄のまもりをやぶって、このシビにいどんできた。

あの勇敢な武将は、敵ながらまことにあっぱれだった。

ジャータカのころ

いくさ場でさえなければ、よきライバルになれたものを――

シビ王はあいてのとどめをさしたときにおそわれたあのいいしれぬ哀しみにいまふたたび自分が包まれてゆくのを感じました。

――この国をまもるためのいくさとはいえ、わたしの命令のもとに敵、味方、いったいどれだけのいのちがいくさ場のつゆときえたことか。

そればかりではない。わたし自身、このいのちをたもつために、生まれてこのかた、いったいどれだけのいのちがわたしの食卓にのぼったか。

なき父王はずいぶん美食家だった。めずらしい料理がいつも食べきれないほどだった。

お祖父さまもそうだったと、母うえがよく話しておられた…。

してみればわたしのこのいのち、さかのほれば数えきれないご先祖からずっと、ガンジス河の砂のかずにもまさる無数のいのちをいただきつづけてきた、わたしはその最先端にいるのだ。

その数かぎりないいのちにささえられたこのわたし、それらのいのちがわたしの

いのちに合流して、わたしとなって、生かされてくれたのだ。
わたしはそのことにいままで気がつかなかった。

いや、いまはじめて気がついた。

いや、そうでない。このタカがわたしにいのちがけで教えてくれた――

シビ王がめまぐるしく思案するあいだにも、タカは飢えにせまられ、目のまえの王のうでのなかへ、ハトをめがけて飛びこんできました。

タカの決死の覚悟をそのすさまじい形相に見てとれました。

シビ王はこころいたみつつ、とっさに右うででタカをとらえました。

左うでのなかのハトは恐ろしさにふたたび激しくふるえました。

ところが、右うでのなかのタカは力なく抵抗のまなざしをむけるばかりでした。

タカにはもう一刻の猶予もないと、シビ王は肌で感じました。

ちょうどそこへ、物音を聞きつけた家来たちがやってきました。

シビ王はハトとタカとを、それぞれ家来にあずけました。

ジャータカのころ

「どちらもたいせつに抱いておるのだぞ。それから、はかりをもつてまいれ」
ふしんそうなおももちで、はかりを取りにでてゆく家来のせなかに、王はきびしくいいました。

「急ぐのだぞ。よいな」

そのあいだに、シビ王はルビーやめのうなどの宝石や、繊細なかざり金具のついた革のベルトをしめました。

そのベルトにはらでん細工のさやにおさまった刀がさがっていました。

バルコニーのてんじょうには、かざがついていました。

おきさきのたいせつなとりかごとをつつていたものでした。

そのかぎに、はかりをつるし、かたほうの皿にハトをのせました。

ハトはあいかわらずふるえながら、タカのほうをじっと見ています。

タカは家来のでのなかでじっと飢えにたえています。

シビ王はこしの刀をぬくと、自分の左の太ももの肉を、いっきにえぐりにとって、もうかたほうの皿にのせました。

それはいつしゅんのできごとで、家来たちはなにがおこっているのか、すぐには理解ができずに、ただぼうぜんと見ているばかりでした。

はかりにのせられたシビ王の太ももの肉は、ハトとほとんどおなじ大きさでしたが、なぜかはかりはハトのほうに大きくかたむいたままでした。

シビ王はこころを決めて刀をふるったつもりでしたが、無意識のうちにためらいがあつて、それでハトの重さにすこし足りなかったのだらうと思いました。タカの飢えがわがことのように思えるシビ王はひくくつぶやきました。

「タカよ、すまぬ。こんどこそ…」

シビ王がこんどは右の太ももに刀をあてようと思いました。

「王さま、なにをなさいます。おやめください」

家来たちがかけよってシビ王の両うでをおさえました。

「よるな。ひかえておれ!!」

シビ王は家来たちを大ごとともにふりはらうと、右の太ももをいつそう力をこめてえぐり、急いで皿にのせました。

ジャータカのころ

はかりはかすかにゆれただけでした。

ハトの二倍ほどの肉がのった皿は、まるでからのように上にあがり、ハトがのった皿は、ずっしりと重そうに下におりているのです。

シビ王はころのうちであせりました。

——これはいったいどうしたのか。はやくしないとタカが死んでしまう——

「こんどこそ……」

シビ王は左のすねに刀をあてました。

「王さま、お気はたしかですか。どうかおやめを……」

シビ王はかまわず家来たちをふりきって、おしよせる痛み顔に顔をひきつらせながら、すねの肉をさらに加えました。

はかりはもとのままでした。

王はついに血まみれの体ではかりによじのぼろうとしました。

しかし、あまりの痛みに気をうしなつて、バルコニーにたおれてしまいました。

家来たちは医者呼びにはしらせ、手当てのしたくを急いでいました。

シビ王のもうろうとした意識のなかに、タカの飢えにくるしむ形相が浮かぶと、はかりの皿が大きくひろがり、シビ王のほうへ近づいてくるように見えました。シビ王はなにか無意識のうちによりよと起きあがり、やがて全身の力をふりしぼって、なんとか落ちそうになりながら、必死で皿によじのびりました。はかりはようやくつりあいました。

「タカよ、さあ、ぞんぶんに食べよ。飢えをみたせ」

痛みにゆがんだシビ王のほほに、かすかに安堵の色がさしました。

気がつくと、家来のでのなかのタカは消えていました。

どこへいったのかと、あたりを見まわす家来たちの頭上から、色とりどりの大きなはすのはなびらが、雨のようにふりそそぎ、それがシビ王のからだにふれると、みるまに傷がいえました。

（賢愚経 卷二）

こういうお話です。今、最後の『賢愚経 卷二』というのをご覧になって、「え、

ジャータカのこころ

これジャータカじゃないじゃありませんか」とお気づきになった学生さん、いらつしやいますか。だったら嬉しいです。実はジャータカの中にこれによく似た話がありますが、物語の運びとしては、『賢愚経』のこの物語の方が大変感銘深いもので、テキストは『賢愚経』から頂いたのです。そつくりのお話がジャータカに載っておりまして、たぶんそれがもとも古い形で、それから段々にもっと感動的な、もっとインパクトのあるお話に次第に変化していったものと思われまふ。これはその一つです。

このお話をどこかで聞いたことがあるとおっしゃる方、もしいらつしやったら手を挙げて、いらつしやいませんか。皆さん初めてですか。そうですね。少しザワザワしておられたのに、このお話に入りましたら、皆さんとても真剣なお顔でプリントに目を走らせてくださっていて、私はそのことがとってもありがたいと思っております。これがシビ王物語で、ジャータカの中の一つの代表的なお話なんです。ジャータカが初めての人にとってはちよつとわかりにくいかもしれませんが、もう皆さんのことですからお察し頂けたと思います。この主人公のシビ王というのが、お釈迦様の過去世のお姿です。ゴータマ・シッダールタとして生まれる、いつかわからない、ずー

つと昔にシビという王様となって生まれていた時に、たった一羽のハトを助けるために、ご自分の体を全部捧げたという、こういうお話なんです。ここから読み取れる教訓が非常に大きくて、そして多くて、とても私には話しきれないと思うので、皆さんそれぞれが、それぞれのお心で読み取って、それぞれに教訓を感じ取って頂けたら有難いと思うのです。今日は、今から少しだけ、時間の許す限り一般的なことをお話したいと思います。

心のハカリ

まず、どうでしょう。ハトって何グラムあるんでしょう。私計ったことありませんけれども、一キロあるのかしら。たぶん一キロはないんじゃないですか。ハト触ったことはありますが、計ったことはない。たぶんこのくらい。ハトの肉ですから。そのハト一羽と、シビ王はたいへんな武勇者のようですから、背も高くがっしりとして、恐らく七十キロか八十キロか、もっとそれ以上の体重があらうと思われるね。それ

ジャータカのこころ

が何と一キロもないようなハトと、七、八十キロもあろうかというシビ王様とハカリがやつと釣り合ったと。皆さん、これどう思われますか。このハカリ、おかしいですね。こんなハカリはないですよ。これは恐らく、私たちの見ている娑婆の、この世のハカリではなくて、お釈迦様のハカリ、仏様のハカリ、智慧のハカリ……というふうに考えたらいいかと思います。あるいは命のハカリという名前で呼んでくださった方もいらつしやいます。つまり私たちはこの娑婆で、娑婆のハカリで、娑婆の物差しでものを計っております。ハトは一キロたらず、五〇〇グラムかそのくらい。ゾウは何トンあるか知りません。そういうふうに、大きい小さい、重い軽い、背が高い背が低い、色が白い色が黒い、財産がたくさんあるない、それから、学歴がどうかであるとか、家柄がどうかであるとか……。私たちは日頃そういう物差しに、意識するかしないかに関わらず振り回されて生きてはい shouldn't でしょうか。何となくお友達の持っているものに目がいつて、「私のよりいいわ、あれが欲しいわ」と思ったりしませんか。お友達より良いものを着ていると、「やった！ 私の方が上等だわ」と思ったりしませんか。ここにいらつしやる皆さんはそんなことはないでしょうか。だったら失礼しま

した。どうも私たちはそういうハカリで、例えば結婚についても、結婚の相手についても、どこかそういうハカリでものを計ってないでしょうか。それに反して、このハカリは、とても考えられない能力を持ったハカリだということがわかんと思います。おそらくアリ一匹、もつと軽い蚊にしましょうか。もつと軽い…、この間、とがった芯の先でちよんとつけたくらい小さい赤い虫を見つけました。お嫁さんによると、クモの一種だというんですけれどもね、見落としてしまう程の小さい生き物が動いているのを見ました。それでもいいです。それと、例えばゾウとが釣り合うハカリ、そういうハカリがここに登場しているわけです。つまり、世間的な大きさ重さでない、どんなに小さかろうと大きかろうと、どんなに強かろうと弱かろうと、賢かろうと愚かであろうと、そういうことには一切関係なく、いやむしろ、それはそれとして大事な働きとして、賢いということ愚かということ、大きいということ小さいということ、強いということ弱いということ、それが決して優劣ではなく、それぞれの輝きを持ってどれもみな命としてみな同じ重さ、同じ重要さを持っているのだということを、このハカリは私たちに教えてくれているのです。

ジャータカのこころ

命の重さ

さて、もう一つ大切なことは、シビ王は今まで、王様としての職務に熱心でありましたから、この自分の命ということについて考える暇がありませんでした。それがこの日、ハトとタカとの場面を目撃することによって、ご自分自身が今こうして生きている、この命のありようを反省してみる機会が与えられたんですね。反省なんて軽いものではないわけです。シビ王様に限らず、私にしても、皆さん方お一人お一人にしても、ここにこうして生きているために、数え切れない命の支えがあるという事実。今日一日、皆さん何を召し上がられましたか。「私はベジタリアンだから関係ありません」という方がひよつとしていらつしやるとしても……。唐揚げ？　じゃあニワトリですね。それは確かにニワトリの命ですね。唐揚げであっても、それから「今ちよつとダイエットのためにそういうものはやめています」とおっしゃる方であっても、食べ物という名のつくものはみな命がありますね。お米一粒でも命ですね。キャ

ベツ、きゅうり：そうでしょう。みんな命ですね。そうなんです。ですから、この世に命を受けたものは、どんな小さなものであろうと大きなものであろうと、平等に他の命によらないと生きていけないという事実には、このシビ王さまは気づかれたわけです。ご自分が生まれてから何歳かわかりませんが、この年になるまで、毎日毎日、無数の命を食べてきている。私は子供の頃、とっても厳しいおばあちゃんに育てられましてね。おばあちゃんはいつもは一緒に暮らしておりませんが、母がお産の時になると、その怖いおばあちゃんがうちにやってきます。おばあちゃんが怖いので、私はなるべく早くご飯を終わって、叱られないうちにさっさと学校に行こうとします。そうして慌てるために、普段はこぼさないご飯をポロッとこぼしてしまうのです。そうするとその怖いおばあちゃんが目をくり上げて怒るのです。「おまんまを粗末にしてはイカン！」と言うのです。わかりますか。「おまんま」という言葉です。「そのお前のお茶碗の中にご飯粒が一体いくつ入ってるか数えてごらん！」と叱られました。そんな無理なこと言わないでよと思ったあの頃から今まで一度も数えたことがないんです。今になってみると、あの怖かったおばあちゃんはとっても大切なことを私に教え

ジャータカのこころ

てくれていたんだなあと、今頃になって気がつくのです。一粒七人の神様？ あらあ、それはまた素晴らしい。今すごいことを教えて頂きました。お米の一粒には七人の神様だそうです。その考え方も素晴らしいですね。これに共通すると思います。それにお米という字は八十八と書くとおわかりました。一粒のお米ができるまでに八十八通りの世話がかかる、手がかかると聞きました。そんなふうに、私のおばあちゃんは育ててくれました。皆さんはなさらないと思いますが、食堂の残飯入れご覧になりますでしょう。皆さんのお皿のお米を一粒も残さずに、お皿を戻していらっしやいますか。どうも残しますよね。そういうことがとても考え直されなくてはいけないことだと思うのです。

「いただきます」

とにかく、私たちは命を与えられた以上、最後の瞬間まで、他の命、私以外の命を頂かないと生きていけないという、この事実。この事実を改めてシビ王は考えまし

た。それは自分だけでない。例えば私も今日一朝、ご飯一膳食べました。一粒七倍
 といったしますと、お茶碗一膳数えたことがあります。大変な数になるでしょう。そ
 れからおかず、その他もろもろ……、たくさん命を今日一日だけでも頂きました。そ
 れが六十一年です。そしてまた、私が生まれるためには両親がありました。その両親
 も毎日毎日、まあ戦争中は貧しかったからあんまりたくさんは食べなかったとはい
 え、飢え死にせずに生きてこられたということは、やはり父は九十三年、母は八十七
 年、他の命を頂き続けてくれました。そしてその両親にはそれぞれ四人の祖父母……と
 いうふうを考えていきますと、皆さんが、私が、今ここに命与えられて生きていると
 いうことの、後ろといいますが、足下といいますが、足下ならたぶん地球の向こう側
 に届くほど、たくさん命を頂き続けてきた、その最先端に私たちはここにいさせて
 頂いているという事実ですね。そのことをこのシビ王物語は実にリアルに教えてくだ
 さっている、そういう物語です。「食べていけないといけないんだからしょうがない
 でしょう」そう開き直らないでいましょう。どの生き物が食べられたいと思って生ま
 れてきたでしょうか。生まれてきた以上は、誰にも捕まらないで、誰にも殺されない

ジャータカのころ

で、一生を全うしたいはずですが、どういふ縁か、私どもの食卓に乗るはめになって、その命はそこで中断しています。中断したその命を、私や皆さんの胃袋に入れて、無駄死に、大死にならないようにしなくてはなりませんね。私たちがこうして今生きておられるのは、もちろんご両親のお陰もありますけれども、その他に社会のもろもろのお陰の他に、物理的に他の無数の命を頂き続けてきた結果、こうして生かせて頂いているというこの事実。このことをあんまり普段は考えません。私は小学校五年生の担任の先生が、「いただきます」という言葉を非常にしっかりとしつけてくださいました。その時に「誰にいただきますをしますか」と私たち生徒に聞かれました。その時は、お父さん、お母さん、それからお百姓さん、牧場の人、魚を獲ってくれる人、それを加工してくれる人、それを売ってくれる人、ほとんど全部「人」でした。まだその時はそれらの食材になってくださったという命ということにまでは触れられませんでしたけれども、このジャータカのシビ王物語によって、私たちが「いただきます」とご挨拶を申し上げるべき相手は、もっと深くさらに無数の命であったのですね。ですから、私たちは毎日毎日食べられたくない命、私たちのために食料にな

つてくださっている命を食べているのですから、それに対してしつかり思いをいたさなくてはいけないと思いませんか？。それで「いただきます」ということを、大切にしないではいけないと思うのです。

先だつての事ですが、富山県の友人からのメールにこういうのがありました。小学校へ生徒さんのお母さんがクレームを言いにいった。「うちはちゃんと給食費を払っています。「いただきます」と言わせなくてください」。いかがですか。タダでもらっているんじゃないやありません。給食費を払っています。子供に「いただきます」と言わせなくてください。こういうクレームが学校に行ったというのです。とっても悲しい、とっても寂しい気がいたしました。「いただきます」はそういうことではないんですね。命を頂くんです。そしてまた、命をまた頂けるようにして下さる諸々に対して感謝を捧げる「いただきます」という、大変美しい日本語なのです。それからまたこういうクレームもありました。「いただきます」はいいけれども、「手を合わせることを押しつけないでください。うちは仏教徒ではありません」というクレームがいったということも、かつて新聞の投稿で読みました。何の宗教であろうと関係ありません

ジャータカのこころ

ね。命を頂くという事実は宗教の如何を問わないことです。そしてまた「いただきます」という言葉がどんなに美しい言葉かということを、私は日本人ですから当たり前になっていました。

ちよつと脱線しますが、我が家は十九年前からいろんな国の人に来て、二拍三日泊まって行くグループに入りました。今までに一七〇人以上の人、十五、六ヶ国の人が見えて泊まっていきました。我が家は習慣でみんなご飯の時には「いただきます」と言いますので、それを知らない人は、「それはどういう意味ですか」と聞かれます。私のしどろもどろの英語で、やっとこさつと説明をいたしますと、大抵の方はビックリなさいます。「そんなに美しい言葉なんですか」と言われます。私はずっと子供の時から言い習わしているから気がつかず、そんなに美しい言葉なのだと、外国の人が感銘する言葉なのだと、外国人によって教えられました。「いただきます」という言葉は大変美しい、日本独特の素晴らしい言葉です。もちろんキリスト教に食前の祈り、グレイスというものがありますけれど、こんなに短い一言で「いただきます」という全てを包むこの日本語を、今日このシビ王物語を聞いて下さった皆さまには、

深く深く納得していただきたい。今まで毎日言ってこられたと思いますけれども、この「いただきます」を、シビ王の心になって「いただきます」ということを思っ言って頂けると、食べ物で粗末にしたりということが減るだろうと思います。かく言う私は無駄にしないかなんていうと、ずばら主婦でして、お料理するはずで買ってきたものを忘れてしまつて冷蔵庫の奥で腐らせてしまつたり、使おうと思つたきゅうりが黄色くしなびていたりということがあつて、決して誉められた主婦ではないのですけれども、そのたびに、「申し訳ないことをした。ごめんなさい」と言う気持ちになつて、気をつけよう、気をつけようと反省だけはしきりにしております。まだ改められない状態でおります。いずれにしても、私たちは女性として、多くの人が子供を産み育てる、あるいは教育する立場にあります。この食ふということ、ただ単に食欲を満たすということではなしに、命を支える、最も厳粛な、命が他の命を頂く大変厳粛なことなんだということ。だから無駄にしてはならないということ。それからまた、私の体の中に合流してくださった命に対して、一つ一つ識別できませんけれども、その無数の命に対して「ありがとう」と同時に、私の中に入ってくださった無数

ジャータカのこころ

の食物が、死んで私の命になってくれたのにふさわしいほどの立派な行いが、私はできていたかと思えば、いつでも残念ながら「ノー」です。とても恥ずかしくて、私の命の糧になってくださった諸々の命に対して、胸をはって、「あなたの命は立派に生かしましたよ」というような人生が送れているとは、申し上げられません。大変お恥ずかしい日暮しであります。ですから「いただきます」と「ごちそうさま」を言いながら、同時に大変「申し訳ない」という懺悔の気持ちもいつもついて回ります。

仏さまのハカリ

いずれにいたしましても、私たちのこの体は、一応、あなたではなく私の体、と認識しておりますけれど、よくよく考えてみると、頭のとっぺんからつま先まで、これは私のですと言えるところは一つもないのです。肉体は全て他の命によって、こうして私の体を構成してくれているので、一応、私の体ですが、私が自分の力で作ったと言えるものは一つもないということになるのです。ですから、よく私の祖母など

は、「この体は預かりものだ」と。「預かった体を預かった長さだけ生ききって、人様のお役に立つ生き方をしないと、お天道様に申し訳ない」というのが、学校教育を受けていなかった、私のおばあちゃんのいつもいつとも言ってくれた決まり文句でした。これは今になって改めて、すごいなあ、祖母はジャータカは知らなかったはずだけど、シビ王物語も知らなかったはずだけれど、明治生まれのおばあちゃんたちは、そういうことをしっかりと知って、孫である私たちに伝えていつてくれたなあと思うんです。このお話の教訓はまだまだたくさんあるので、話しきれませんが、とにかく大切なことは、私たちは平生、人との比較、他との比較によって右往左往してしまいがちであるということ。もちろん比較が全て悪いことではありません。自分が不服を感じるような時であっても、今現在イラクの人々とか、アフリカの大変な国の人々たちのことを考えれば、私たちの生活が今どんなに恵まれて、あるいは恵まれすぎて、贅沢をいたしていることを思いますから、そういう意味での比較は大切ですけれども、私たちの比較はどうかすると、人が羨ましい、これが比較の大半になりがちです。そういう比較ではなくて、そういう比較とは別の世界に、どんなに他と違ってい

ジャータカのこころ

ても、私が私であることにおいて、かけがえのない命だということ、そのことをまずしっかりとこのジャータカ物語を繰り返し読むことによつて、承知して頂きたいと思います。

それから、もう一つ、こういうことがありました。昨年九州でのことですが、このお話をさせて頂いたあるお寺で、終わったあと、私より少し若いくらいのお母さんが来てくださつて、目を真つ赤にしていらつしやるんですね。「どうなさつたんですか」と聞きました。その方は大変辛い人生を生きてこられた方で、お母さんに出て行かれ、お父さんに育てられました。でもほとんど口をきいたことがない。嫌で嫌でたまらなくて結婚したら、ご主人とも別れた。その間にできた子供さんがこの間交通事故で亡くなったとおっしゃいました。それでご自分はまた好きでないお父さんのところへ戻つて、ほとんど口も聞かないで農業をしておりますと、こういうふうにおっしゃいました。ですから生きていることが嫌で嫌でたまらないとおっしゃいました。八年間、一步も外に出ないで、引きこもっていたこともありました。ところがシビ王物語を聞いたら、仏様のハカリがなんて温かいんでしょうと思いましたと、このことを言

いに、わざわざ講演の後で涙ながらに話してくださるということがございました。平生、恵まれて生きている私には、そんなに深い感動は読み取れませんでした。辛い立場におられる方が、自分が一番辛いと思っていただけども、それは間違いでした、私は今、こんなに恵まれているんだということに気がつきました。私は今まで人と比べて娑婆のハカリばかりで物を見て来ました。これからはこの温かい仏様のハカリを中心に物を考えて行こうと思いますと、こんなふうにおっしゃった。「すごいなあ、ジャータカ物語はこんなふうに聞く人の心深くに届いてくださるのだなあ」と、私は大変感動いたしました。

実はこのシビ王物語は、ジャータカ物語の中で大変有名な物語ですので、物語として残っているばかりではなく、美術品としてあちこちに残っているようです。私はまだその実物を見る機会がないのですが、少し前の『芸術新潮』という月刊雑誌に「アジャンター石窟大公開」という特集がありまして、お友達が電話をくれて、「ジャータカの特集よ。早く本屋さんに行ってきたさい」と教えられました。それまでジャータカというのは、非常に専門的な方が作られた高価な写真集であつたり、専門の学者

ジャータカのこころ

の書物であったりしたのですが、こうして誰でも買えるペラペラとした月刊雑誌として、ジャータカが紹介されるということが私には大変嬉しく思われました。アジャンターというインドの石窟寺院があります。これは長いこと砂に埋もれていて存在が知られていませんでしたが、イギリスの植民地時代に、トラ狩りに奥地に入ったイギリスの軍人が、これをたまたま見つけて掘り起してみたら、大変な石窟寺院だったということがわかって、以来ずっと研究が続いています。この壁画の中にこのジャータカが載っております。それからまたアフガニスタンから出土されたレリーフにも、この物語の場面が載っておりますし、それに限らず、あちこちの仏教遺跡からこの絵や彫刻やレリーフが発見されております。それによりますと、今皆さんが聞いてくださった物語は、シビ王がご自分で刀をとって肉をえぐっておりますが、作品によりましては、王様ご自分ではそれをしませんが、家来にさせているという場面も見ました。痛みに耐えかねて気を失って、横で扇で扇いでいるようなレリーフも見ました。ですから、このシビ王ジャータカはいろいろな変遷をとげているということがわかります。この物語、『賢愚経』のテキストを編纂なさった方は、お釈迦様でいらつしやるか

ら、他ならぬお釈迦様の前生でいらっしやるから、こんな辛い仕事を家来にさせたりはなさらないで、ご自分ですというふうに作られたんですね。もっと古いジャータカでは、「体ではなく目をください」と、「私は目が見えなくなりましたから、シビ王さまの目をください」という形になっております。そういうふうにいるいろいろな形のシビ王物語がありますなかで、『賢愚経』のシビ王物語が、私には大変インパクトがありましたので、これを物語にさせて頂いたのです。

さて、タカは消えてしまいました。一体どうなったのでしょうか。一体ハトは何なんでしょう。一体これはどういう話なんでしょう。皆さん、きつと疑問を持たれる。あまりですぎた話ではないかと思われるかもしれませんが。どうぞ、そういう疑問をお感じの方は、授業の宣伝になりますけれども、第一と第三の金曜日に真宗文化研究所で行われている、聖典輪読会では、そういうふうなことも話題になるかと思えますので、興味がおありの方はどうぞいらしてください。それから、シビ王ジャータカだけではなく、おそらく皆さんがご存じであろうと思われるジャータカは、満月の表面にウサギがいるというもの。ご存じでしょう。月の表面にはウサギさんがいるという

ジャータカのこころ

ふうに、幼稚園で聞きましたか。そのお話も実はジャータカの中に出ている『ウサギ本生物語』です。それから、イナバの白ウサギの話をご存じと思いますが、あれに類したのもジャータカに出てまいります。それからイソップ物語とよく似た話も出てまいります。そしてそのジャータカの中には、ここにはたまたまシビ王というお釈迦様の前世をご紹介しましたけれども、お釈迦様は前世において、人間だけでなく、ありとあらゆるといってよいほど、様々な動物の生涯を経験しておられます。また人間として生まれた時にも、このように王様であるばかりではなく、身分の一番低い、インドの四つのカーストにも数えられない一番下のチャンダーラ、不可触賤民と訳されていますが、そういう身分に生まれたこともございます。そこで、ありとあらゆる苦難を経験していらっしやるので、二五〇〇年前にお釈迦様としてお生まれになった生涯の中で、過去世における諸々の経験がみな役に立って、悟りを開かれてから八十歳で亡くなるまでに、悩みを相談にいられた方々に、いつでも適切なお答えをすることがおできになったというふうにも考えられております。つまり、お釈迦様が王宮に王子としてお生まれになって、二十九歳で出家なさったのなら、それまでの生

活経験だけで、女性や非常に身分の低い奴婢下僕の人たちや、想像もつかないような悩みを抱える女性たちの気持ちになって、全くその身になりきった適切なアドバイスができるはずがない。それはジャータカに書かれているような、無数の過去の生涯を経てきて、その時の諸々の辛さ、苦しさをしっかりと記憶に残されてきたので、それが役に立って慈悲に満ちた相応しい説法がおできになったのだというふうな考え方も行われております。

ジャータカを今日初めて聞かれた皆さんが、一度にいろいろ私が申し上げて、少しごっちゃになったかもしれませんけれども、時間がきてしまいました。シビ王物語の、この娑婆のハカリでない、命という大切なものを見失わない、仏様のハカリがあるということ覚えて頂きたいと思います。

おわりに

そしてもう一つ、皆さんはまだお若いから、死というものを間近に感じないと思い

ジャータカのこころ

ますけれども、このジャータカに接する時に私が思い出す言葉があります。これは金子大栄先生とおっしゃって、もう三十年前以上に亡くなった大谷大学の先生ですが、

花びらは散っても 花は死なない

というのです。私たちは花びらが散ったら、「ああ、この花はもうおしまい」と簡単に片づけてしまいますけれども、それは花びらが散る、花が枯れるだけであって、花の命は終わらないと、そういう考え方ですね。理科学的な生物学的なものではなくて、今、目に見えている私たちのこの命だけが命ではない。私の命のずっと後ろ、あるいは足下ずっと深くに、数え切れない無数の命の一番最先端に、私たちは今、生かさせて頂いているということ。そのことを今日しっかりと心に留めて頂けたら大変ありがたいと思います。

お疲れの時間に、ご静聴ありがとうございました。

——二〇〇七年十月十二日——